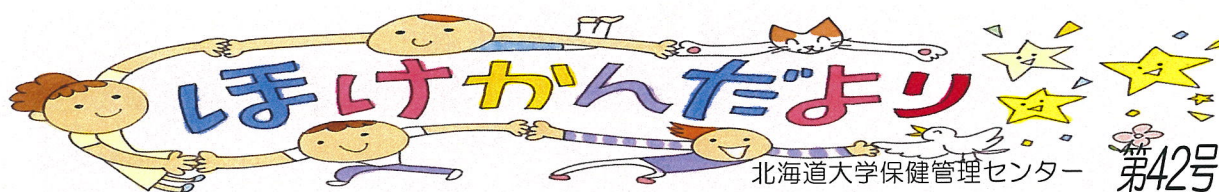




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	母の筆跡：学校を介した遺品
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 42, 1-1
Issue Date	2004-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39248
Type	article
File Information	hemmi_hokekan42.pdf





母の筆跡——学校を介した遺品——

教育学研究科長・教育学部長 逸見 勝 亮

◇僕の父三谷幸雄は1948年3月24日に亡くなった。父が福井県坂井郡細呂木村に生まれたのは1914年9月10日だから33歳と5ヶ月余の生涯であった。母は盲腸炎手術後1週間で死んだと言ったが、1942年1月28日には盲腸炎の手術を受けたと記す大叔父の葉書が残っている。また、1943年1月1日には「こんどは腸がつまって」手術を受けている(九嶋雄三郎の九嶋一雄宛葉書)。1943年6月4日には「幸雄も半年休み今月一日から出勤」「生活のことは自分等も手伝え不自由はしてゐませんが、楽ではない筈だが、特別に心配するほどでもない」と伝えている(九嶋雄三郎の九嶋一雄宛葉書)。長期療養は生活にも不如意をもたらしたのであろう。死因は母の記憶とは違うのではないか。

僕は34歳までに死ぬかもしれないと考えている子どもだった。

◇九嶋雄三郎は母の養父であり、九嶋一雄は母の弟である。一雄叔父は1923年1月5日に生まれ、1944年10月26日に死んだ。戸籍には「バシー海峡方面二戦死」とある。21歳であった。戦死公報が届いた直後であろう、死亡届けは1946年1月4日である。遺骨はない。祖母は、年に一度来る富山の葉売りに「戦死したその日にずぶ濡れの息子の夢を見た」と泣きながら話していた。1953年頃の記憶である。戦死という不条理な死は、かき口説く祖母の顔とともに、僕には名状しがたかった。

僕は祖母の悲憤を想い、遺体のない死を強いる力に怖れをおぼえている子どもでもあった。

◇僕は1950年に室蘭市立天澤小学校に入学した。担任は及川勇である。2年生の途中から担任はYに代わった。

「通知表」(1年生)の「身体のようなす」欄では、体のつりあい・姿勢・栄養・活力・運動機能・皮膚の色つやは「よい」、耐久力は「普通」とある。担任は「持久力に乏し、素直な明

朗なお子さんです、歯磨きの励行……反抗心が強い、おれと云う、さんもつけずに云う」「学習態度——飽きやすい点多し」などと細かい字でびっしりと書いてあり、余白は全くない。2年生になっても「歯磨きの励行を望みます(毎日)」とある。担任が交代した3学期以降は日常的生活習慣改善の指摘は一切なく、3年生では「身体を丈夫にして下さい」、4年生では「男の児童は野球やその他の運動を好むものです」、5年生では「計算に一寸手ぬかりがある」と簡略である。6年生の担任は「性格的に正直・素直さ・真面目さに少々欠けるように見受けられます」と、中学校の担任は毎年「授業中の態度が悪い」と書いている。当時はもちろん今もこれら「通知表」の所見には首肯しがたい。

しかし、僕は小学校1・2年生の学級担任の記載には今もって赤面するばかりである。観察眼の確かさと勤務に精励している様子を想像する。長じてから偶然出会ったが、立ちすくんだ。既に「すっかり見られてしまっている」からである。変色した「通知表」を開くたびに、歯磨き以外は「その当時のままだ」と、僕は担任の顔を思い浮かべ立ちすくむ。

◇母は「学習態度——飽きやすい点多し」との担任の指摘には堪えたらしい。「必ずお書き下さい」と書き添えられた「家庭から学校へ」欄に、鉛筆で「長い休中これと言ふ事も出さずだゞ先生のお力をたのみにすごしてしまいました。此の後にも今までの成績をたもちたいと思って居ります。あきやすいとの事まづそれをなをして行きたく思つて休中見ました。おきの付くてんおしらせ下さい。よろしくお願い致します」と書いている。

1950年度室蘭市立天澤小学校1年3組「通知表」の「家庭から学校へ」欄にある短い文章が、手許にある母の唯一の筆跡で、唯一の遺品である。

